初恋の相手

主義

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公　土生瑞貴

中等部から遠月学園に入学した。中等部一年生のころは目立った行動はしていなかったが二年生になるとある出来事があって有名になる。それからは注目の的になってしまっているが本人は気付いていない。

そんな彼が残りの一年をどのように過ごすのかを記す物語。

目次

想い　1
新入生との会話　9
挑戦状　16
川島麗　21

想い

『もも』は彼の事が大切で誰よりも想っている。それを本人に伝えても「そうか」としか言わないだろうけどそれでも良い。別に『もも』は彼から愛されたい訳でも見返りを求めて愛している訳ではない。『もも』がこの人の事を好きで大切に想っているだけ。それ以上でもそれ以下でもない。

名前は土生瑞貴（はぶみずき）。彼を紹介するとしたら無口であまり人と関わりたがらない。何で彼がそうなったのかは『もも』も知らないけど彼がそれで良いのなら別に言う事は何もない。

料理の腕は『もも』と比べても決して劣っていない。彼の専門分野は『もも』と同じで「スイーツ」。彼の最初に食べたときは驚いた。だって見た目も可愛いし何よりも味がそれを裏切る事がなく完璧。この皿はもう完成されて何者もこれをよりおいしくする事は出来ないと思ったほどだった。だけど本人は決して自分の料理を誇ることもなく当たり前のように料理を行っていた。その料理をしている時の顔がとても切なそうな顔をしていたので今でも鮮明に覚えている。

交友関係は決して広いとは言えないが同級生や一つ上、一つ下の生徒からはかなり支持されていたりする。彼のミステリアスなところや外見に惹かれたような感じだろう。まあ、モテそうな顔をしているし、そういう人たちがいるのは仕方ない事かもしれない

今日から『もも』たちも三年生。彼と過ごせるのも残り一年。彼はあそこまでの腕があれば引く手あまただろうし、自分で開業して店を経営するかもしれない。『もも』としてはずっと彼の側にいたいけど、彼に迷惑はかけたくない。

今は学生だからずっと一緒に居られるけどさすがにずっととはいかないと思う。だからこそ、この一年はとても大切に過ごしたい。

大きな部屋に円のテーブルがありそこには十個の椅子が囲むように置かれている。まだ全員は来ていないので五席ぐらいしか埋まっていない。

「それで何で今日は招集されたんだ？」

隣に座っている綜みゃんが疑問に思ったのか口にした。確かに綜みゃんが口にするのも理解できる。だって今回に関してはお題とかを聞かされていない。こっちだって暇な訳じゃないんだから早く片付けて瑞貴くんに会いに行きたいんだから。

いつもは事前にどんなお題なのか聞かされているものだ。

「全員が来てから話すよ」

司は綜みゃんの問いに対してそう答えて読書中の本にまた目を落とした。司にしては読書をする何て珍しい。あまり本を読んでいるというイメージ何て無かった。

「それじゃまだ皆も来ないことだし何か話そうぜ!!」

竜胆のテンションはいつ会ってもこんなにテンションが高い。五年ぐらい一緒にいるけど竜胆が低いところを見たことがない。

「別にいいが何について話すんだ？」

「そうだな～……瑞貴の事なんてどうだ？」

瑞貴。

「もも。瑞貴とは最近どんな感じなんだ？」

「どんな感じってどういう事？」

「だからキスとかしたのかよ？」

「キ…キ…ス……」

「こりゃしてねぇな。まあ、でも瑞貴はそういうことにまるで興味無さそうだしな。もしかしたら、ももが好きな事すらまだ気づいていないのかもしれないな」

竜胆は腕を組みながらそんな事を言い出した。

「ももは別に瑞貴くんに愛してほしいから愛している訳じゃないの。だから別に気付かれなくても良いの」

「だけど愛されないより愛された方がいいんじゃないの?」

「まあ…それはそうだけど」

片思いより両想いの方が良いに決まっているけど無理に愛されたくない。瑞貴くんに告白をする気はない。もし、今の関係が壊れてしまったらもう「もも」は「もも」でいられなくなる。彼に出会ってしまってからもう、ももは瑞貴くん無しでは生きられない。

「瑞貴は料理しか考えてないだろうからな」
　確かに瑞貴くんはほとんど料理の事を考えている。どんな時でも新しい自分の皿を増やそうとしている。彼はよく天才と呼ばれている時があるけど・・・ そんな彼にも努力が根本にある。最初から天才だった訳じゃない。それは瑞貴くんの隣に居て本当に思った。
「だけどそこも瑞貴くんの魅力の一つだと思うよ。その何事に対しても一途なところも良い」
　そんな話をしていると二年が入ってきて後はえりにゃんを待つだけになった。
「先輩たち、何の話をしていたんですか?盛り上がっていたようですが」
　盛り上がっては決してないと思うけど。
「瑞貴の事だよ。お前たちも会った事あるだろう?」
　瑞貴くんが有名になったのは中等部の二年の時だから今の高等部の二年生までは彼の凄さを知っている。中には生でそれを見た人も少なくいる。

「会った事はあると言えばありますね。ですが見たことがあるだけで話したことはないですね。それに土生先輩はあまり後輩や同級生と話しているところを見かけませんし、いつも側には茜ヶ久保先輩がいるので後輩の方は気になっても声がかけづらいのではないかと思います」

「まあ、一色の言う通り、ももはずっと瑞貴から離れないよな。もう少し瑞貴を自由にさせてやったらどうだ?」

「ももは別に瑞貴くんを縛っていないし決して嫌がっていない」

さとにゃんが変な事を言うから。瑞貴くんは嫌がっていないと思う。もし、ももの事を嫌いだったらいくら無口の瑞貴くんでも言ってくれると思うし…

なんか考え始めるとどんどん悪い方にいってしまう。これが終わったら怖いけど確認しない…

「明らかに茜ヶ久保がへこんでおるぞ。竜胆」

「悪い事言っちまったかな。誰からの評価や評判も気にしないももだけど瑞貴の事だけ

は話が別なんだよな。瑞貴にもし、嫌い何て言われちまったら一生立ち直れないだろうな。そんなももに瑞貴が嫌いかもしれないなんて言っちゃったのは失言だったな」

新入生との会話

僕にとって料理は全てと言って良いかもしれない。僕から料理を取ったら何も残らないだろう。それほどまでに僕という人間のほとんどを形作っているのは料理だ。料理無くして僕を語るのは難しいはずだ。

僕の得意料理である「スイーツ」にはこの学校に入学するまではそれなりの自信があったりした。でも、やっぱりどの世界にも上には上がいるもので……その自信は入学して三か月が経った頃に壊れた。何故かと言うと二人一組で料理を作るという授業があった。そこで僕は茜ヶ久保と組むことになった。僕は誰と組もうが変わらないから誰でも良いと思っていた。

そして料理に取り掛かってすぐに茜ヶ久保の手際の良さに驚いた。そして彼女が完成させた「スイーツ」は人を見て楽しませるほどの美しさがあり味も勿論、申し分もなかった。初めて自分より「スイーツ」をうまく作る人に出会った。そして茜ヶ久保はそれを軽々とやって見せる。

それは僕にとって超えられない壁との出会いだった。最初は茜ヶ久保に追いつくまで努力をしたし死に物狂いで腕を磨き上げた。

そして今に至るまで僕は一度も「スイーツ」で茜ヶ久保を超す料理は出来なかった。

そんな僕も三年生になってしまい後一年でこの遠月学園を卒業する。この五年間という長くてあっという間だった日々を思い返してみるとそれほど……何も無かった。茜ヶ久保と出会った事や一つ上の先輩だった人にアシスタントとしていつも呼ばれていた事など色々とあったがそこまで印象に残るような事は無かった。だからこの最後の一年は……僕が一生忘れられない位の出来事が起こってくれる事を願っている。

それに何でか分からないが……この最後の一年は何かが起こるような気がする。これは只の勘でしかないけど……僕の勘は案外、当たる方だからもしかしたら本当に何かが起こるのかもしれない。

そう言えば、今年は転入生がいると言っていたな。それに今回は薙切さんが試験監督だったらしいから転入生はそれほどの腕を持っているんだろうな。そうでなければあ

の薙切さんが入学を認めるわけがないからな。

僕は午前中で授業が終わって暇なので敷地内を適当に散歩していた。茜ヶ久保も今日は十傑の招集があるから今日はしばらく来ないだろうしな。

普段は茜ヶ久保がほとんど僕の側にいるからこんな風に一人で何かをするのは久しぶりかもしれない。そんな事を考えながら歩いていると赤い髪が特徴的な男性生徒が荷物を持ちながら歩いていた。

確かこの先には……極星寮があったはずだ。となるとそこの新しい住人なのかな。だけどこの時期に新しい住人となると多分、この男性生徒が転入生なのだろうな。

重そうなものを持ちながらここから極星寮までは疲れるだろうし少しぐらい持ってあげるか。

「ねえ、そこの一年生」

僕がそういうと赤い髪の少年は振り返り僕の顔を一瞥した。

「……何すか?」

「重そうだから持ってあげようか？」

「本当すか
!????」

「うん！極星寮までは遠いからね。ここから一人で持っていくのはかなり苦労するだろうからね」

そして僕は転入生と思われる生徒の荷物を持ち極星寮に向かう事になった。

「君はこの遠月学園で何をしたい？」

僕は隣を歩いている赤い髪の少年に言った。この学園を卒業できた人は料理界で一生生きていけると言っても過言じゃない。まず、卒業できる事が難しく試験に合格しなければ卒業する事は叶わない。

「俺は……そうっすね……一先ずこの学園のＴＯＰを取りたいっすね」

「そうか……頑張って……この学園は料理の上手い奴で溢れかえっている。幸い料理

を競う相手には困る事はないだろうしね」

僕にも茜ヶ久保が居たからここまでスイーツを極めたと言っても良い。茜ヶ久保と会えていなかったら今の僕はないと言っても過言じゃない。それほどまでに茜ヶ久保から受けた影響は大きい。本人はそんな事を知らないだろうけどね。

「そうっすか。それは楽しみっすね」

そして無事に着いたところで僕は赤い髪の少年と別れて帰路についていた。すると前から見覚えのある人物がこちらに走ってきた。その人物とは茜ヶ久保だ。

こっちに着いた時には息を荒げていた。普段から運動はしないのに急に走るから疲れるんだよ。

「大丈夫？それにしてもどうしたの？」
僕は茜ヶ久保の背中をさすりながら聞いた。
「だって……瑞貴……くんが……いつもの……場…所……にいないから」
それぐらいならそんなに焦らなくても良いのに。もっと急用が僕にあるのかと思ったけど……どうやら無いようだな。
「ちょっと後輩の荷物を運んであげていたんだ」
「え……瑞貴くんが後輩と……話したの!???」
「うん。久しぶりに後輩と話した気がするよ。普段は絶対に話さないからね」
僕が後輩とかと話すとかはほとんどない。同級生の中でも十傑に入っている人とかとは話したりするけどそれ以外の人とは話さない。多分、僕に対して無口な印象を多く持っている人が多いのは確かなはずだ。
「どうしたの!???調子でも悪いの!???病院に行く!???」

茜ヶ久保は心配そんな目をしながら僕に向かって言ってくる。

「そんなに僕が後輩と話したのが意外だった？」

「だって普段から話すのは面倒と言って話さない瑞貴くんが話したんだもん。それは「もも」も驚くよ」

「大丈夫。熱もないし風邪も引いていないよ」

そんな会話をして僕と茜ヶ久保は帰路についた。

挑戦状

この食戟を自分の目で見た者は生涯、忘れる事が出来ない。それほどまでに目の前での食戟は衝撃的だった。食戟と言ってもその食戟は非公式のようなものだったから正式な記録には決して残らないが見た者の記憶に一生刻まれる。

対戦カードは司瑛士ＶＳ土生瑞貴（はぶみずき）。お互いに中等部の二年生でありながら実力は高等部の生徒にも負ける事はない。

だが、誰もが司瑛士が勝つと思っていた。司瑛士は中等部の二年の中でＴＯＰだと思われていたからだ。だけど結果はその場にいた全員の想像を覆すようなものだった。勝者は土生瑞貴。３―０という圧倒的なまでに凄かった。

そしてこの食戟を見たものはこう語り継がれることになる。『土生瑞貴の歴史の始まり』

なんの因果か、その場には後の『十傑』と呼ばれている者たちが集まっていたらしい。

新入生が入学してから一か月という月日が流れた。僕はいつもと変わらぬように茜ヶ久保と行動を共にしている。そう言えば、最近、妙な事がある。何故か茜ヶ久保が前にも増して一緒にいるようになった。前までもかなり一緒にいる時間が多かったが後輩と会ったあの日以来、前よりも増した。

「茜ヶ久保」

「何？」

「何で最近は前にも増して僕にくっつくようになったの？」

「……なんでもないよ」

隣を歩いている茜ヶ久保は僕に返答をする時に目を逸らした。言いたくない事があ

るんだろう。茜ヶ久保とはもう長く一緒にいるから癖とかも色々と知っている。だから例えば、茜ヶ久保は言いたくない時には目線を逸らす事や良い事があった時は髪を触る癖とかも分かっている。だてに長い間、一緒にいるわけでもないからね。

「そうか。僕の勘違いかもしれないな。そう言えば、今年の一年生はどう？」

「レベルは決して低くないと『もも』は思うよ。転入生の子はまだ実力が分からないけど今の時点で将来、十傑に入るような人間は多くいると『もも』は思うね」

茜ヶ久保がそのように評価するとは珍しい。あまり人に興味を示さない茜ヶ久保が興味を示すとは。

「茜ヶ久保にしては珍しいね」

「いや、『もも』は別に一年生に興味があったわけではなくて瑞貴くんが話した後輩を見つけ出すために探し出すために調べたの」

「そんなの調べてどうするんだ？」

調べたとして分かったとしてもそれを知ってどうするんだ。

「いや、興味があったの。瑞貴くんが自ら会話をするような相手が一体どのような相手なのか」

「そんなに僕が話したのが意外だったのかい？」

「うん。だって今まで自ら話すような事はほとんどなかったから」

そんなに人と話さないようなイメージが茜ヶ久保の中にはあるのかな。まあ、あんまり僕が話さないのは事実だけど。でも、一体いつからだったかな。僕が自ら人に話しかける事を控える事になったのは……

もう昔過ぎて覚えていないな。『もも』と知り合うよりも前だったか後だったかも。

それからも茜ヶ久保と話しながら校内を歩いていると後ろから誰かに肩を叩かれた。

「先輩」
誰だろうと思い後ろを振り返るとそこには……赤い髪をした後輩がいた。

「何だい？」
この子の目からは決意と熱意が見て取れる。今にも僕を食いたくてうずうずしているような感じだ。もうこの後輩が一体なにを言おうとしているのか分かってしまった。この学園でこの目をしている者が言おうとしている事なんて一つしか考えられない。

「先輩、俺と食戟をしてくれませんか？」

川島麗

まさか食戟を一年生から挑まれるとは微塵も思っていなかった。あの場は適当にあしらったけどあれじゃ簡単に諦めてくれなそうだな。別に食戟をしたくないとか闘いたくないとかではないけどこの時期に十傑の仕事を増やすわけにはいかない。茜ヶ久保も最近は色々と十傑の仕事に追われているみたいだし、ここで無駄な仕事を増やす事はしたくない。

これから一年生は宿泊研修があるはずだ。僕と食戟なんかしている場合じゃなくなるはずだ。

それにしてもこれが新学期最初の食戟の申し込みだ。昨年、食戟を申し込まれたのはたったの一回だ。それも知人だ。何故かは分からないが僕に申し込むことをする人はほとんどいない。これでもそれなりに料理には自身があるんだけどな。まるで誰かが僕に食戟を申し込ませないようにしているのではないかと思ってしまうほどだ。

そんな事は絶対にないだろうけど、そう思ってしまうほどに本当に少ない。

僕から申し込むのも良いけど……なんか気が引けてしまう。それに僕に申し込まれて迷惑と思うかもしれないとか思ってしまうと中々、申し込むに至らない。最後の年だから申し込んでみようかなと頭によぎったりするけど行動に至らない。

だからいつか僕が食戟を挑む時が来たとしたらそれは僕がかなり勇気を出したと言

う事かな。

――――川島麗ｓｉｄｅ――――

私が憧れた料理人。今まで料理人として憧れたのはたった一人だけ。私がその人に憧れたのは遠月学園に入学してから一週間ぐらいしか経っていない頃。第３調理室の場所が分からなくて迷っていた時にその人は私に声を掛けてくれて助けてくれた。

それが初めての出会いで…二度目は食戟をしているのを実況している時。そこで私は先輩に憧れることになる。だって先輩の料理は全てが完璧と言っても差し支えのな

い料理。先輩は実況している私のところにも料理を運んできて「余ったから食べて、口に合わなかったら他の人にあげて」そう言って去って行った。

先輩が持ってきた料理は見た目も香りも味も完璧だった。

そして何よりも…先輩が食戟に勝った時に見せる笑顔が忘れられない。寝ても覚めても先輩のことしか考えられない頭になっている。いつも『もも』先輩と一緒にいるから話し掛けるのも難しくて、私はあの食戟の時以来、先輩に話し掛けられずにいた。

だけど今年で先輩は卒業をしてしまう。

だから今年が最後のチャンス!!!絶対に話し掛けて、私の気持ちを伝える!!!!!!!